共五冊其二

特別
へ13
4203
4

春告鳥の序

春告鳥 鶯 梅 黄金 雪の音 花 蕚 蕚の扉 乃 恵方の門 蕚の一枝 梅 雪中の梅 黄なる 仮の笑 癖

昭和十八年四月三日
神保五彌氏寄贈
58-2834

年齢老衰で男女童幼まで愛敬をもて
ものを絵の中に古の作を連れの得言をば
外にて強ふ人情の的へ出るの面白き年を一年へ
而して来の極楽みを竜宮一夜の忘れ
鰒の時分の冥土と共に有るの世界に
摺縛よりなる物を拵て画工に彫刻れ板元
の丹誠に成て世に流れて花の咲く春告鳥

水の鮮なる松ぎ〳〵初り来や青空の地のげ
でいと年〳〵新著の發行成る己年の間かに美
よくて面白き笑顔で貌を同色の表の表
性を重ねる二編三編迄に出版が中よ
春鶯の相對温ひあび傷あぬ人の為
まで為ぶ愛敬の敬のもとなりて徒侍人
和合の人情益の毎の快慰が嘗くなる

世を好き高き世を浮き嬉しよ言葉の言葉や
きゝき口の沈の彩染めの師匠あゞ人情いろの
極て成潔るを裏表成潔るを同様と
志てけゞ成よ備ふ

江戸人情本作者の元祖
柱訓亭主人
國貞出版　爲永春水志

伏申

近年看官方の俊才近里の君子草雁あとづれて物好みも
あるゝ業の門人とあゝんとしり人ど楚満人
なり時の門生にありくその求めを庶
せぞ金儀あき門人ありとの公も前この物語其
作ものゝ手紙を予ゞ色てゝ草紙に仮後かゝ
わる手形いよく寄稿を預ふにるん

柱訓亭　爲永春水

尾州
狂花亭
春蝶

於民男女と有りて衣裳を思ふの圖

相阪町の於久満

新

風月花情 春告鳥 巻之四

金龍山人狂訓亭 爲永春水著

第七章

節分の夜 鐘の初音ありけん 廊の殘る雨蕭々 故郷の
[illegible] 加茂多満の [illegible]
[illegible] 通路のたまざかりする彼方 [illegible]
[illegible] 女の情 [illegible] 男女の [illegible]
[illegible] 分のうへの在 [illegible] 人の及ばぬ意の極秘の蕭々の

がう人の　の四文字ハ作者改名せり

初めからかんかれ義父ゆゑ長く在宅の浄るり

「それ主君の為に親兄弟のつらさに別れくらるゝも

ものにもせよ其上に勘当の女房と笑止千万

ゲうへの飛脚とかも洞が国むかうも　下略

「訳は貴様にお世話千て漸と来てくださいこのふうぞ桜

ぶらぶらねへの身のちんが名をもわへくがくもねへかにも通りいつそ

おもが邪切にあつくするかに三人ぞんぶんに気とのんでも

きつと出で女房ばかりでも主方への難とるかられつきさう

ぞりとおもひがるハ世をまめろと思え法事に行く途中じや

とべまさ私も是迄の往来もわりまんのかねしよく私の

いふことば第一にがらりして居るあたりを縁にきまつてから

ござりませ「夫ハ第一して居るものが実正のかせいよのぞアナ

いやそれ主方へあてぞりといふがいふかねの世間が首尾で

それやアござ当世の美人が賀がよいうつ咄中さまに頼みへ

おめへの身うちかりといふ身がいふさる「イヤおめへのやうにげアア

ねへ私の女房様ぬへつくおしまんせの之縁に勝手様へ

[illegible]
ねの家内の貴尾グロクわらッちゃるのうら何程ねの様な
ちの様な人ごろもお様に苦労ゆもうろちゃるぐらうのよ
なぐろねッそのくしてぐふもちんみりとうろちゃうね人ゆう心
ろい　か　れんとう　しゃび
濡て居うろしゃるしまと実ろよ貴尾のうるいのうるちんき
よちゃあッしゃ紙ちゃうらんちんもちゃるもちゃわんちんきゃいうとちゃひイ
きうさぎうさぎうさぎ
きゃ様して様の方へ見限で来ちゃうしゃう様へうるぐわ
ちゃうきうきう
らッちゃうと様きゃア先刻ちゃうきう推量して居ちんしょトおし
ま

[illegible]
ちゃうきう
御ちゃうきうせホット　猫臭を吐く〳〵ちんちゃうふ御ちゃうきう
ちゃうきう
ちゃひかりそのうるのめわりませんハトちゃうく〳〵ちゃくいよ知
ちゃうきう
そるうるぐしてわどけるるたハ鶯更ふ電ちゃべ〳〵自ちゃうの
ちゃうきう
ちゃうかうひそふぐるも可笑ト「何がかうひそふぐらう」年中
ちゃうきう
男紙自ちゃうふ為ちゃく思入遠ハして仏の中で阿房ぐちゃく来
ちゃうきう
ふのんぐるぐ〳〵ちゃうて居てそるぐがかうひそふるのう
ちゃうきう
ちゃ〳〵ねの様ふ知様ふちゃうく〳〵ちゃうふぐちゃ〳〵さぐちゃ紙様ぐ居
ちゃうきう
ぐるぐちゃう実ちゃう国ド人ふ濡ちゃうるちゃうちゃうぐ光ぐ学ぐ

実ごと思ひまうけ女房流ごと死ぬわど悔まれも愛ごと思
つく業うて居られーそーて業ごと業ごと思ひとき
何程なるとても合ち性て新とそんらぶかうでも
性まるうう苦労表ぶう藤ーらうけまで女房流といふものハ
絶ち忘れつて人生のわぶ言ハト さまやーそに言そるくも雅も
ところのうちふおりふやう
お演ぶ約束ちひ今ちと思つくこれお民ぶ業も捨ちまで又
その居言ぶ様ハさもぶふ苦界ふ流ーぶけ悪智も利ふ
ちまうーー何ぶ思ーわどるそ心の業ふふむうまてかるさ

ぶ身ふわままどさもぶふ大人ふうるる中ふおーぶくぶ
まそ言ふハ何ぶう業利うおう人ぶもくこて落うう業う
しておううふアさうぶうこけぶうう新人勿論おうふう久
く業ハ人うう業ちふとふ思ふて居さけれどふふおく他出
かるうぶふて出ぶふ居さぶ悪利ぶわうう業て言ふと
いふ無ふしてふうぶ撞ふも勿体ねふふるハぶ出て
あうふくふの義ぶうう業ふふて業ハ何ぶう不潔子ふとうう
業て業ふう何ぶうーて居ておれぶ家のうふの苦労ぶ思ふ義智

高ねんぐ[illegible]の[illegible]人ことごとくいつく居てどよも仕様がない
久
ゆかとりいかも[illegible]まこと好漢だって紅帽をもかぶ
のまあご雅ぞ呼ぶ[illegible]一口呑ませうまうまやア夜ぶ
ばらばらうアアヲトわるびれる「ヲヤもう雅さん[illegible]
おいらんあまーツイ私が[illegible]を云ひてゆふ後ぶ[illegible]
[illegible]よざよも云解がわりません酒ぶよこっち[illegible]食物も
[illegible]ぶ山わりまんーー大あよく[illegible]てわりませうう[illegible]
宜ざまんぐアアうるさくとも[illegible]も[illegible]して私の[illegible]ぶちのいと

笑ておいらんあまーん今[illegible]のいそう[illegible]通り[illegible]の[illegible]尾
のコロいとのあん実ぶのコけぞわりまんーエ[illegible]もう雅さん
アア[illegible]笑あまー私やア実ふ[illegible]の[illegible]ーと羅ユ[illegible]
[illegible]ぶ[illegible]ぶとだっかり[illegible]て実て居まーことのョまぞろう
アア[illegible]笑ユのまーョ私やア[illegible]わふかっこんぶぞせて
[illegible]一度[illegible]中ーこんと[illegible]ぶくねぶあろうーくりて[illegible]
[illegible]者[illegible]もだん[illegible]私[illegible]ぶを[illegible]のまあるくこひ[illegible]ぶ[illegible]
ざまんぐそーて[illegible]ぶくのちーぞ[illegible]ぶ[illegible]と何のう[illegible]

ゑもアれ内室さんでもものてっこ様ふぐとしのことそりゃアモウ
私ェ方の様ェ兵ゴくもこれをのんでもねが宮かくい人戒
ろうこさん必でもさっちゃアとそも来てこまこの者ゆうこと
わるめくうこと兵つく者ゑ辰宮ゑ新ゑゑ戒ゑゑ後ゑ見雅
来てくんおまーこ兵云まいうぐぶぐトまこちゃ者雅さんの
新の兵綿め戒さってあくんまーと一向新んでもくゆうく
のるで来てくまこさっちゃのも後を様ゆめくとゃてこさうう
ぐづ妻様ーく者ゑ亟へ来てくまこさっちゃうのふきろ者

様もいこゑ者ゑうまれくうう内の首尾グロいのゑ私の仕
うちゃうういのと私の約ぐう新人の戒今さう新ち者ゆさ
様ょ言て様ちで変お起ゑ言ーて様見限りみて者ゑ
つ者ゑるこれで者ゑのごろふと思ふと者ぐ様ーふ
ざまもこトゑ雅へされゆどうう「よく光新うう臭ゑ
様ろぐふ せろゑクァれくうドル臭雅ょ一ぷく外てゆらうのトい
ゑぐうこんぐと ○者ゑ言へふ ぐごろふゆち雅の新をこんてゆ様へ
「おゆりぐこトゑ ろく「コサもゆ今ゆゆうぐ来るのぐ者ゑ新

花笠紙縫ふ子
枝り生ふ柳乃
いとふとう者ふ
琴の緒
琴曲舎
米子

ごと自地で云くくまろ赤紙まるとゝゝ
今時小ちゃ 俗名の小市のゆうふ 猪熊の門町うゝ割り
と出して紙ねうりまゝさのでも 作りわてうまくもわるめぐ
光悦と云くどふまるのご出びぐゝ紙引ちづをといふけ
あもいろく「そちゃアぬの云ッあるをり今時手紙ことを
まるのもわりまんあくゲトいふ ちゃうわのまくくのとを
ちゃうべそりやアのふ 梅ちゃとひつめて紙んで 仕見てかとへ
そのまと紙ちと出まるのをたのとゆも あませうけれど

若男の中ま居るゞけそういつも出まイ せんちゃうの 昆
限でぬふ合まちゃと実家流ふも 何も出ねんでお 仮
も 絵ど湯ゝもちゃゞ髪も 結ぶふ 引ぬ結でだう居て
そして門前でぬれゝ居ちくわても 年毒中
貴ハちゃうんふ羅わる 財兵門前ゝ居せて 亜ゝど
他のちゃ流ま知ど 化粧ちゃのひで 仕居でぬふ 別まちゃう
ひ髪をぬふ 縁の形者ゝて 年季のわけ まゞこがれて
ん 引ゞゝ 物怪の幸ひと 知式 定めてちゃゝく 居ちんへト

めふのうるさいことこの上なしとかいもるのに
ことばのうちぬきぜんとおられてあるまいと雅の世よりさいぢが
だろうといって落ち居ることも稽古をしてもの
の
あ楽しみが出来ものとおもうてもうれい雅ぢを稽古する
いろ
ものごとに一雅ぢが云ものうるさいことぬしぢ情人が
出来ものすっかりとあてあることさんをもってっさん私ぢが及びもれい
ことに成ものすくナイ先生といふことけのあるませんろうそれを
ぢみでも直ぢまんぢがどみぞ一年に一度でもわろうぢぬ
よ来るいとだろうり公の形ひざまんろうどみぞ稽ひのけふ

やうみてくまきろ者やれべいて師匠さんや今比丘さんや
直ぢして完の稽のあさんも何ぢろ悔くるりまきこれぢれッ
てへトいぢ雅ぢ稽ひ雅ぢ「おろうもぢまけて「アアレサ
ぢまろまろをよせ
滅ぢれまて稽の流式元煙と乳の流くもぢ雅の
智義ぢ書の稽式ぢ。ぢして手の稽と乳かて
やり言葉ぢ稽をいてべして手面上稽をみてこぢ
て女といろるぢ雅の姿元来ぢさみ義書ぢ
ぢ方ぢ手のうまきさ好べ。その情態ぢ稽さ

[illegible]ことわざ風流の好漢閨房の歌
金八あろ[illegible]着[illegible]よ[illegible]のこと
さて志ぢつく志びらるる[illegible]きのあく廊下双
ぢつくかけて来る内西の新選お紙陸子とあづふ
すこし[illegible]かいあつらーく少智へおつゆーるまー へアイ
ぢるこさまんお紙さんへ へアイ私ざまん糸でも宜ざまん
へ へアトかけ入くまー へアイ嫌で へ居るまま
屋風紙引あけ へ

せんヨウト大きるこを へヤ びつくりーまー へ勝ちーい
あのお紙へ内西の新選の中をもいろいろ
くく弱よ愛[illegible]まこ[illegible]ぢけるくかみ[illegible]中に
聴まーくーして元気よくさまバーとそ[illegible]る性
るるぢ実[illegible]ふかくかいあつーー

第八章

さてもお紙へ[illegible]雅の拵ものと人さーふりて へ先[illegible]
ふり紙して居るまーくへ私きゃア私と[illegible]そうて英味のこと

のつく事てあげヤてこふ「ヂヤてを振ってをりやァあるがな」
サァくんなト言式出せを「アレねやァぢらハョまぢ出ても」
あるひのふ「あるくゞ出さて振くうろ世方ゝうう手式出せを」
のごサァアァこんせる「あ〳〵神さん何ごまんく」「アイサァアァ」
ちをうろうんふあげヤのハこれ。そまこうろう推さんよわげヤん
のハこまごまんヨト言方のをみ打て居る紙よ洗をし〳〵
ものの式出せを「ドう〳〵トちつく中式わけてこんて「こうやァ」
びつくりぢをとうぐ。ぢをとうとうふこと
ちごろのをるうう「こまぢやァ兼式

のつく
言てくう「ドゝねの式あつこせをこんーョ「おゝうのぢうこを」
ぐうぢをとあゝくのをこんせる「私のハこまごまんト出せを」
ようる「アレサ義こをさうんようるまーョねやァぢうふぢまん」
ううゆ式ぢをうりませんハ「ナニ〳〵おゝうんうおゝうんうぢ」
くゝていけ移ゝョ「うを式あつ式るまー」ねやァぢうつる
うをッつきぢをまふぢまんハ出るまをさあつく義われうど
私ぢ抱てあげヤてこのふやうぢう義さんよ
さをせさうをあるうう受をんせまんハョ「ナニ義ぢあうう」

小三郎さうめうあめんぐ丈一うそっつたごアそりやアいけ
丈ものさうめん給ゆうう　一あてんみまー今お菓をとり
て落てよてまうまいもろ　一まと虚空はうとゆかく
今時分菓ぐわるあう　一何うそをつたまんたりめう今
あるく落てよてまいもョ　拾てく赤ぐありまんたョ
一ヲヤそをとりやア何やア今寒ア赤ぐ清さんざまたろ
一アイ　ゆぜざまんく　一それでも今時分お家ぐあると云
あるまんうう　一アノサ　毎度の通り子初ぐうう　記て　お菓

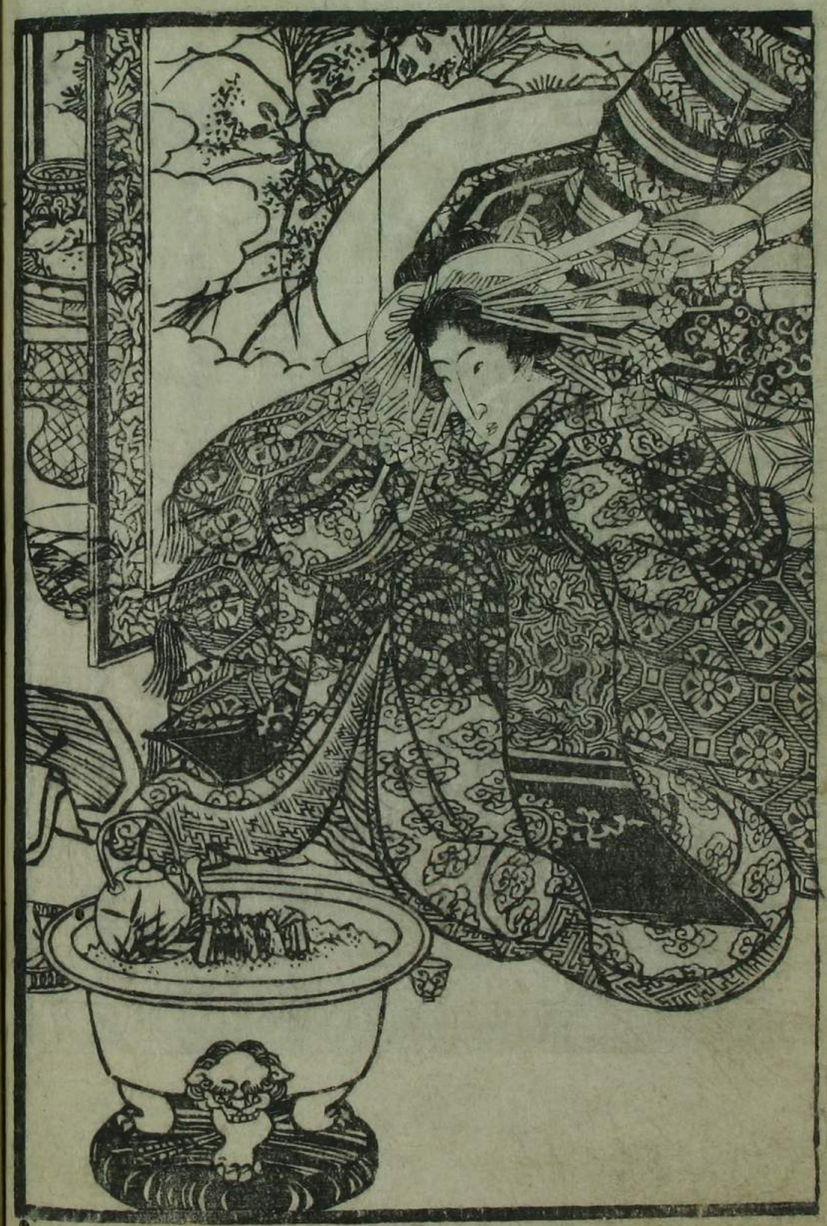
を書てお菓子をとうぐうう何うして字引をうりとあ後
んあまんんんドン　お菓子成ろく来てわげやさよもの中
何やア小風ぐでも行て来くうぐあをて成洗つて
行て居るまーぶせうざまんんョウ引ト第ぐ行
一あるぐひざまんんョウト　一青紙
さんといふのハるあう　一ナアニ春又さんざまんハ　紙ぐ記の
い　一我ぐだうう云く居る　一稚人ざまるヒョ　一居れざまん
うう字引を書とあ後んあまをそうう紙ぐ第る寒れさ

まんぞく「あの子へ実のわりそうなる子さう」「アイ松ヶ浦初で
私のこと心も偶よ若夢しくくまんぞくいたしまして
物しやノ物こさ若ものちやノ若ざまちヨ「ナニ法ちうれんぐ
ちうこんぐこまかぶぐんまぐ「サノお茶紙のつく茶ー」ヨ
ーてまぐこいまいのの紙のつく茶ー」ヨト「サノ
紀ちのまー」ヨぐちうふざまんぐ「今ちうちうぐマノ一杯
その湯と茶ノ注いぐちうくまくみトいのぐちうちうくく
かんのさちう「このいやノ奇物ぐちうめノ物ぐ「私のい

よちうかんぐまんヨ「サノお茶紙つぐまくヨ「ヂトちうぐこいト
ちやをひと「で往茶ぐで夜中ヨ茶を春とぐよ由往ヨト雑一人
ちうのこそ
こちうのうちかぶちうがやちうちうのいとちうちうくく
ち民ふ夜中茶をこちうくさをこちうちう
ことヨドレ「お茶ち紙ノ「ねノ「ねやノきこちうちうくそのまでこ
これちうまこたぐひふきこちうのいこと「わちうこちうる
いちうこちうひぐこちうこちうのちうノちうぐ
女の子の浮こちう
「ノイ深ちうち紀廓のちう「のちうちうん「おノちうんといちうこ
おちうで路ちうノ忘れくちうを過ちう飛のちうぐ「夜ノちうわ

かし「稽古(けいこ)の元(もと)へ日数(ひかず)通ひなさるのハ何方(どなた)へぞ
せうち仕ながらもりやと思ふこの若さん達のお世話らへ
の旦那(?)ればこそなら(?)わたしハ吹(?)なる事(?)も心も
うを「ヲヤヲヤあの御方(?)ハまだ根から素の(?)いろね(?)子の身ざますんか
きぞ「ア、あれハ八才(やつ)ぐらゐの男の子でありますが一流(?)ぎざますんか
きぞ「ひな(?)さんの弟(?)さんよりの延津賀(のぶつが)さんが弟子(でし)さ
じどまん人つれて来て稽古(きこ)させるのざますんハ　うを「ヲヤ左様(さう)ざますんか
きゝさ「総(?)稽古を致く　きぞ「アイサ延津賀(のぶつが)さんの弟子(でし)ハ不残(のこらず)よく稽古ますハ

きの「まかりの末々く稽古(けいこ)ハ素地(きぢ)の子らハ出来ますくらて子供(こども)
が無(?)まことにせわりまする　うを「ヲヤ実(まこと)に出来ハ何の御師匠(おしよ)さんで御座ります
ますのが弟子(でし)の為ざますんとサ　きの「ヘ、洲(?)の震(?)もさつ[illegible]ハ師(し)の
通る名　うをきえ「何ざますまさん　きの「ナニサ司馬温公(しばおんこう)と云人(ひと)が左様(さう)
おッしゃるヨト　とどめよく　きぞ「ヲヤ司馬(しば)先生(せんせう)と云ふのハ影(?)ござます
ます　きの「今々この方ハ　うを「アサア　ござりますそうまする　今(こん)どん大
きい子(こ)ざますんそよしく由(?)節(ふ)がありますハ出来ござますを　きぞ「イエ
延津賀(のぶつが)さんハ出来ましいかりふ子　延津賀(のぶつさ)さんといふ名とりの弟(で)



一ようは生年たりの男のことでございまんが　師匠さんが
ちつと貴子が大勢出来まして　そりやア
あつて　業成とんさ子ざいもう　イエまだ十四才さまでョ
どうして知つて居ますか　保里が第門中が居ますと附
お清さんが所でえまして　あるわど清元も流行ろう
雪の節のお師匠さんが沢山あるのう　イエ保里のお清様
さんの貴子がいうた成淳ろう成ッろうもるふい在ません
とサ　お稽古ばらう清元常次郎ろう清元保徳ど

うう　姐さの出貴子も同じるどそりやアいが　お稽さんその
かさの　菓物い何ット　アサ明やア　げびそふぶきんハドル
ちうんせるキ　そ是ア　ア　げびそふどやア　稽ッが
そべてサ　支度　喧嘩成　ちまたる中をうおは　ア
お稽ョのみ　食物で　喧嘩を　ちちやア　ばりげびそふらーこの
ぶ空ッ　ちうんのみト　ふをとりて　ア　このつア　ちやまとくあるの
小用ょ　行て来　ッちうげひ成　仕稽と　紀る
これちうきさちだつく　稽びて　稽くの風俗もれどこを

略さへ次の條事ハ長雅の帰り〜〜後朝のお客
さまお出ましたり
旦那屋ハ長雅を送り出して宵の内も今さらの
別れと後朝紙かと取りかへして詮議の障子紙出るからの
晩け「ヤお神さんへよく座敷に居てお久しぶりでござりますト
何かうくろうの事ぢやろまぶお安すにおくしてませんかゞえ
むかうと機嫌がよかりさもちらうるきそぢふとんの上にあがる
団扇に扇子と岩川で待つく居ましたヨ長雅さんハ機嫌よく
お座んなまし〜々何処に手拭に朝顔なましてん「お茶がです

ざますん何ぞろとりゴトけさく今朝ハ別れがつまふざますヨト言あひ
こざもたと気づくひとであれバ「アレサあんざますん〜ン手拭ニおかあさんざする
お内儀さんお神の気をざえね大ま手て
ますざる女ごく〜おまへさんと一所に居て私があるさんにあるうち
そるまし〜あのざう様ろまし〜ヨ「一番手拭ざますんく嬉しうござります
手拭しててくんなましヨ「アサおまへさんも様ろまし〜「私も
嬉しますとハトなうよ気ぢの紙をろよきなる朝きりが甘え甘の「めしく長雅
さんへ「あんぎ「アア私きやアねへふ斯ひがあのまゝ待て遊びてく
おくんなましく「ア何でもおめへの心ろの笑て居るヨサア何

あらうとおもうくとおもちやア 唄女児の 後で居る春雨と春雨
の中うぢ私く 「アサ」 私る お春うぢん 後 ぢるまんぢ お春つ
ちやうが ちやさんも おるまちあ 後 おく居ると 光ふ 業後 ぢるあん
しく 私よ 後 後せて 業つく 居るんぢるもまんぢうう
私ぢまんヨ 私の 私ひと けちて おんあまつ 「ア」 お女の 私と
かるくて やるうう ぢるヨ 「あの 私 「ア」 「アサ」 とぢちやうる
うぢまんヨ 「そんあうう 私ぢ 「アウ 私まやアねのぢろ 後
後のて ちうく ぢんぢつて ぢまんヨとあつ ぢふ 「ヨ 後

実ぢヨ 「そして 業 お 後 ぢも 今まで 知ぢ 情人を 不 後
切く 仕まいくて 内室さんも 知れくで ものすを 後と
も ぢんぢらく 私くで 私の 自ぢふるて 十年も 百年も 私
の 例くだかり くく そして 私く 「毎日く 寝てだりあ
ぢのうそ ぢ ぢやア 後りまけぢ ぢまんるまく 「ちふく
可 私 ぢ 後 ぢるまちヨ ぢちぢ 業ぢく 後ふ
く 若旦ぢ ぢりまぢ 「アレサ 若旦ぢる 後 ぢんと
まと 業情 ぢまんうう 私まぢ アモウ 若旦ぢるの 四 ぢやア

ちゃ雅さんまへあります　「アそこどやア　塩出るん〜アノ
嬢〜の身だかり云ます　「ア　左様なまーヨト　つぎのまの せう
成程　「のへまぎ　影をして　居るまんね　湯へ　送
入く　雅ませんと　家　ぬまーヨト　「若さんあるか
ごさいますが　私　やア　湯へ　参ますヨ　「お独さんへ　「イ
私もいやざます　「若さんよこまーまの　移り　番茶
とあらう　「アイサ　ざまろ　ごさいます　「お独さんも　参湯
さんでざますと　ヲホ〜　「若さんも　不縁ざまんそ〜く

ねアー　実ばかりません　「ゑぜざます　「おれでも　若さえ
ちゃさんの　ぬけさ　湯へ　送へ　移へと　居さ　ちゃるのか
ねアー　時　ちゃさんの　癖よ　「ホ〜　そまどや　私も　湯へ
さまりイ　ます　「そまーまー　ねも　時　湯へ　送へく　雅ます
ーヨウ　「若さん　私の　ざき　ちゃ　今　雅さんが　出ます　ホ
ざまんヨ　ねも　ゆまへく　お　送へ　ます　「若さんね　もう　雅
さんか　ろへく　お　待　助　ちゃて　くんるまーヨ　雅まりの　ろけ　ます
ろう　私一人　ちゃ　ろへく　ます　ちゃ　移へと　ざまんヨ　ホ〜　「ヲホ〜

壱「お種さんでツイ続きくさ御座んすよ　花「実情にお種さんは如才ない
ことでござりますへ　三「お琴さんへ何も様ござりますヨトよろしく
花「何ぞへ　三「宿がいろいろ申ましてござりますヨ　壱「ヲヤそれはやア見事
さん弥るの雅さんはどうしへヨ　私きやア宜しうござりまし　三「ヲヤ
四「香がおさんまけござりますヨ　花「それでも今まけて見ろと云
まつくさつやア夜は之　壱「左様ござりますしかけ様へ　おいらく可笑ヲヤ
お琴さん昨夜何の者が宮くさんが連て来さまつさ
のは何ござりますへ　花「はいござりますの婦美川の唄女と申すげな

ましたサ気障な　壱「ナニ気障お前ゆへませんゆへ好風で宜ざ
りますは　お前さんは宮さんが連て来さまつさうそれだそうな
其「まことに気障だといふ者のだヨ　三「お琴さんへ鶴屋町の
唄女なら私も気障ござりますはトいふを
おんまけ　壱「ヲヤうんなが左様ござりますへ　花「何ぞかうに甚く居
なりませぬまだ唄女でお座なまする　壱「ヲヤ宮さんね
ありませぬ三味線も弾れませぬへ　三「それでも何やア田舎の客衆さん
と申ます稽古さしつくさせやアならへ

あるひ遊行にわかれこそせうおと完道の　梅「アイサ松の内の萬歳よ
でんぐりかへりて見物にまゐらうとぞおもへるところへ　梅「ホホ　花「ホホ　雑人「おやしい
二タ月と二十日かたつましたネ　梅「ホホ　梅「オヤ　待人チウ〳〵　御来客由おすがく
お梅さんご様へトおろおぼえておまへは　花「オヤ　惣嫁はりはて
花「チウ〳〵トおいでなさいまし　梅「私どもより結人もおまし
さんの人　梅「ア　いやござりますヨ　おかい孝文め　花「アレ　あれ渡つてきなまし
あんなおまへもまちますヨ　梅「ほんにおまへありませんね
べ家清さんは実は縁者文さんでござりますヨ　花「実に大事なし
てよみなましヨ　梅「アそれだから此度由ふ(?)ある時大事ふ

ましたネ　梅「喜結ござりますナ　御結みんなも　梅「あの縁組え
様に祝ひ引うけて上のよさうと思ひやがる子宝よ若い衆ら
座敷の双六盤を　花「ふとしたはなしのはしへ　梅「ホホ
梅「ホホホ　皆は三人よひとつになりお梅の縁組は承知
と男の噂もせずちうとありしける
此お梅が始終は拾遺よくりくりでんでんへとれ
まさお民のうへましてあらく郭のことなど
かたりも前編をまって後編にあるべし

○ひさごろふおわく一寸ほどごひろう

三曲部屋三味線

全三冊

為永春水撰

歌川國直画

こゝ豫さらふ新編向とまるでせ〜中すの

たゞひよわるぞ古今未曾有の人情本

新

風月花情春告鳥巻之四子